

アルミ缶リサイクル活動を始めて30年 車イス100台寄贈



今年でアルミ缶のリサイクル活動を始めて30年になります。活動当初は校内及び寄宿舍だけの小さな活動でしたが、現在では島内各地域に活動の輪が広がり、百世帯を超える方々から協力を得ています。また、当初からアルミ缶の売却代金で車イス購入し、島内外の福祉施設や東日本大震災の被災地へ寄贈してきました。

ボランティア部は、平成5年以前は郷土芸能・ボランティアクラブとして地域の方より地踊りや御神火太鼓を習い、島内の老人ホームなどで慰問活動を行っていました。

平成5年度よりボランティアクラブとして独立し、寄宿舍生でもあったひとりのクラブ員が「寄宿舍で大量に捨てられる空き缶を何とかリサイクル出来ないか」というひと言から活動が始まりました。当時はペットボトルよりアルミ缶やスチール缶の飲料水が多く出回っていました。また、この頃は環境問題やリサイクル活動などがマスコミにとりあげられていた時代でもありました。当初、回収したアルミ缶をどのように都内の回収センターへ運搬すれば良いのか考えていました。クラブ員全員で新聞や雑誌などを調べ、八丈島で行われている「資源を大切に作る会」の取り組みが、特に参考になりました。この会では、回収したアルミ缶をコンテナに積み込み船で東京の港まで運び、都内の回収センターが港に取りに来る流れができていました。船に積み込むことで運搬経費（容積で計算）がかかりますが、いくつかの企業に協力を得ながら活動が行われていました。本校でも同じような経路で回収したアルミ缶を

運搬できないか企業に当たってみましたが、上手く協力を得ることが出来ませんでした。そんな時、本校には水産系高校の特色でもある大型実習船があり、年に何度か乗船実習で東京港へ向かう時に運んで貰うことができないだろうか考えました。また、東京港から回収センターへの運搬は築地近くで働く卒業生から2トントラックを借りて、運ぶことができるのではないかと考え、行動をおこしました。

活動当初の売却量は400kg・売却代金は32000円でしたが、5年後には売却量1400kg、8年後には売却量2200kgと年々アルミ缶の売却量も増えて、卒業生の2トントラックでは運ぶことが出来なくなってきました。その頃、大島社会福祉協議会からボランティア普及助成金の交付を受けられるようになり、そのお金で4トンのトラックを借り、顧問自ら運転して回収センターに運んでいました。しかし、事故が起きた時の問題、レンタカー代金や運搬時の顧問の旅費などを売却代金と助成金から支出していましたが、そんな活動に行き詰まりを感じていました。

平成12年にアルミ缶リサイクル協会やリサイクル推進協議会より感謝状を頂きました。この賞がきっかけとなり、東京港よりアルミ缶回収センターへの運搬を協力して頂けることになりました。そして現在に至っております。

令和4年度は、生徒の皆さんと地域の皆さんのご協力により、2567kgの売却量がありました。前年度の残金を合わせて8台の車イスを購入し、大島の福祉施設に寄贈しました。今年購入した8台目の車イスは、アルミ缶のリサイクル活動を始めてから丁度100台目となる記念すべき一台となりました。30年前にひとりのクラブ員のひと言から始まった活動が、生徒や大島丸の皆さん、地域の人たちにリサイクル活動及び福祉活動に興味を持ってもらった発信地となれたことに喜びを感じています。

地道な活動ですが生徒や地域の皆さんの協力を得ながら、この活動を長く続けて行きたいと思っています。更に高齢者の方や障害のある方が、今、何を必要としているのか、小さな声を聞き逃さないように、心のこもった活動をボランティア部として長く継続していきたいと考えています。

2月17日の寄贈式に際しての岡村光璃さんの感想です。

小坂先生をはじめ、ボランティア部の先輩たちが途絶えさせることなくアルミ缶回収・潰し・売却・車イス寄贈という活動を積み重ねてきてくれました。約30年間の活動を経て記念すべき100台目を寄贈する事が出来ました。車イス100代目寄贈が出来たのは私たちだけの力ではなく、アルミ缶回収に協力して下さる地域の方や生徒、アルミ缶を運搬してくれる大島丸の船員さんたちのおかげです。

多くの方々の活動や協力が繋がって100代目寄贈という歴史的瞬間に立ち会えたと思うと心が震えました。

実際に使用してくれている介護士の方から「軽くてノーパンクですごくいい」と褒めてもらい、日々の活動の努力が実を結んでいるのだなと強く感じました。これからもより多くのボランティア活動を通じて今まで支えてくれた人たちや大島がより良くなる未来のため一生懸命取り組んでいきます。



2学年海洋系航海実習

1次は11月9日～27日の19日間、2次は11月29日～12月20日の22日間で実施されました。

1次は大島岡田港を出港後、まずは大阪に寄港しました。大阪では海遊館や道頓堀へ行きました。生徒たちはご当地の食べ物や文化などたくさん触れ合ってきた様子でした。大阪出港後は24時間ワッチをしながら那覇港へ向かいました。ワッチは船酔いに苦しめながらも必死に自身の職務を全うしている姿が印象的でした。沖縄では、美ら海水族館・国際通り散策、慶良間諸島でのダイビング、ひめゆりの塔や海軍司令部壕での平和学習など行いました。戦争の恐ろしさや悲しさなどを肌で感じる事が出来ました。那覇出港後は、海況が悪かったため新島沖で生物調査実習を実施しました。

2次は大島岡田港を出港後、東京へ入港し食料積み込み等を行いました。東京出港後は和歌山港を目指しました。和歌山では和歌山城見学や市内散策をしました。その後、船内で陽性者が発生、生徒は濃厚

接触者に認定されたため1度東京に戻り乗船実習を中断・延期する事になりました。その後、再び東京から乗船し24時間ワッチをしながら大阪へ向かいました。強風のため大阪入港が1日延期になり、1日で大阪入港→海遊館見学→大阪出港→神戸入港というハードスケジュールになりましたが生徒たちはメリハリを付けながら行動していました。神戸では海洋博物館見学後、市内を各々散策しました。神戸出港



後、大島沖で生物調査実習を実施しようとしたのですが、強風のため中止になってしまいました。

今回の乗船実習で生徒たちは自然を相手にする事の難しさを実感したようです。自然は我々の都合よく動いてはくれません。その様な状況でも仲間たちと協力して今自分たちにできる事は何なのかを考えて行動するという大切さを学んでくれたと思います。

「乗船実習を経て」 剣持佑輔

私が今回の19日間の乗船実習で学んだことは三つある。

一つ目は社会の縮図の一端である。時間を守る。礼儀を正す。役割をこなす。それが当たり前でできた上で上陸という褒美がある。苦手な人が居ようと辛い作業だろうと自分がやらないと動かなくなってしまう。船上とはそういう場所であり、これらは社会と同じだと教官から教えて頂いた。実際に仲間が船酔いでいなくなった時、自分への負担が大きくなる事があったため、それは実感できた。

二つ目は仲間の存在、協力の大切さである。仕事をする際に一人でやるということはどれだけ大変かということを感じた。日々の航海当直を始めとする作業や、食事、居室での娯楽等の生活面まで仲間の存在が大きく関わっていたことから学ぶことができた。助けてもらった分、この先返していきたい。

三つ目は社会問題の現状である。この実習中では戦争と海洋ゴミ問題について学ぶ機会があった。戦争については沖縄で戦地跡を見学した。戦争の醜さ、被害者の心情、繰り返してはいけないという使命感にかられた。海洋ゴミについては実際に調査を行った。外洋だろうと潮目には多くのゴミが見られ、細かなプラスチックは1分に1度は見ることができた。自分の想像よりもゴミが多い状況を知れた良い機会だった。

最後に、これから学んだことを踏まえ、仲間との協力や社会問題については積極的に受験対策に活用していきたい。社会問題についても大人になったときの社会的な適応に活かすことで、将来の夢の実現に大きく近づけた実習にできたと思う。この実習に協力してくれた船員さん方を始めとする多くの方への感謝を大切にしていきたい。

御神火ライド運営協力

11月19日、伊豆大島を自転車で疾走する6回目の御神火ライドが開催されました。伊豆大島で開催されるイベントということで、本校も3回目から協力させていただいています。生徒の活動内容は、スタート地点で郷土芸能部による御神火太鼓の演奏、島内の3つのエイドステーション（休憩所）の地層断面・トウシキ園地・大島公園において参加者に対して大島の魅力を、パネルを交えながら自分たちの意見や感想を説明しました。今回参加した生徒たちに対して、運営スタッフの方や参加者の方から感謝の言葉をいただいています。また、このようなイベントへの参加を通して、生徒の達成感や成長を実感しています。学校の存在意義についても多くの方々に理解されると思いますので、今後もこのような機会があれば継続していこうと考えております。



吹奏楽部アンサンブルコンテスト出場

12月27日（水）、28日（木）にアンサンブルコンテスト（東京都高等学校吹奏楽連盟主催）に出場しました。1年生チーム管楽4重奏（佐藤大地、堀江真央、渡邊時絵、松本圭奈）、2年生チーム打楽器3重奏（武澤隼輝、遠嶋栞南、中川泰平）の2チームが出場しました。大島南高校時代を含めても、創部初の大会出場です。

前日は日比谷高校で練習をしました。練習場所を提供してくださったオーケストラ部の中里先生、お声がけいただいた岩淵先生ありがとうございました。

初日は1年生チームです。初めての府中の森芸術劇場です。前に演奏していたチームの人数が多く、教員側が緊張してしまうくらいでした。しかし1年生たちは堂々と演奏していました。前半は不安な部分もありました

前半は不安な部分もありましたが、後半にかけて盛り返していました。

2日目は2年生チームです。3人でトライアングルのみでの出場です。他のチームがトラックで楽器を運搬するのに対し、相当コンパクトでしたが、演奏は負けていませんでした。きれいな音色を響かせていました。

結果は両チームとも銅賞でした。審査員の先生方から激励もいただき、来年の大会のために頑張っていきたいと思います。

生徒の感想を紹介します。

「案外緊張しなくて、終わった後にミス少なくて良かったです。その感情しか残ってなかったです。」（次期部長 堀江さん）

「初めて舞台に立つ経験をしてとても緊張しました。その時の体験を演奏、発表会出場への糧にして、頑張っていきたいと思います。」（部長 武澤くん）



郷土芸能部東京都中央大会出場

高文祭郷土芸能部門中央大会が1月7日江戸川区総合文化センターで開催されました。3年生4名、2年生2名の6名での出場でしたが、昨年と同様に6台の太鼓を並べて7分30秒間御神火太鼓乱れ打ちを演奏しました。目標としていた金賞には届きませんでしたでしたが、銀賞を受賞しました。部長の古屋君は審査員特別賞を2名の審査員から戴きました。



子供を笑顔にするプロジェクト

小池東京都知事の肝入りによる「子供を笑顔にするプロジェクト」によって全校で都内の劇団四季『バケモノの子』を見に行きました。大島からの交通費・通学生は宿泊費も含めて観劇することができました。本校の生徒が都内の施設で観劇するということはこのプロジェクトが無ければ実現しませんでした。



校内マラソン大会



2月16日3年ぶりにマラソン大会を開催することができました。大島町競技場をスタートし女子5km、男子8kmのコースでした。久しぶりの学校行事で生徒・教員共々すがすがしい気持ちになりました。

男子の部				女子の部			
1位	1年A組	向井	武男	1位	2年B組	市川	愛里彩
2位	2年B組	須田	琉雅	2位	2年B組	横山	想
3位	1年A組	廣瀬	松太郎	3位	1年A組	古屋	心渚



3年船舶系 みはら航海

12月17日から20日で小型実習船「みはら」による東京湾航海実習が行われました。課題研究の授業で大島から東京、東京から横浜往復、東京から大島の航路を研究し、生徒達で船員役を分担し、実際に船を運航するものです。今年は荒天が予想されたので一日早く出港し、翌日を休みとするなど臨機応変に対応しました。航行中は穏やかな海況で他船の動向や変針目標の確認など実践的な実習を行うことができました。この中の半数は船員志望です。この経験を基に更に勉強を深めていって安全航海に貢献してほしいものです。



東海汽船AI就航予想1周年

八丈島、三宅島、新島、式根島の定期船の就航予測を始めて1年が経過しました。日本気象協会などから取得した風速・風向、沖合の波の予測データをPrediction One Bizに学習させ、予測に必要なデータを生徒たちが試行錯誤しながら選択、就航予測のモデルを作成しました。予測AIは八丈島の就航予測正答率で95%を記録するほどの成果を出しました。現在はさらに精度を高められるよう、システムを模索中です。

就航は各島で1日1回、1年間続けても、365のデータしか集まりません。また、10日に1回欠航すると仮定しても、欠航のデータは40弱です。島によっては季節により運航する船舶の種類が異なる場合があり、データの数はさらに少なくなります。このようなことを加味して、こちらでデータを厳選し、チューニングをしていかなければいけません。もしかすると、今使用しているデータの他に、潮の流れなど、現地へ行ってみないと分からないものがデータとして必要なのではないかと考えています。

このような試行錯誤をしてつくったデータを、本校の生徒たちは公式Twitterに公開しています。反響はとても良く、「この予測を見て、出発日を1日早めました」「予測を見てスケジュールを変更し、大事な仕事に間に合うように帰ることができました」といった声も届いている。コツコツと発信し続けたことで、就航予測を信頼する人が増えたことは、生徒たちにも好影響を与えています。

AIという未知のものを自分たちで簡単につくれるとは、生徒たちは思っていませんでした。今後、生徒たちがどうAIを使っていけば良いのか、どう共存していけるのかという風に考えられるよう、成長していかれると良いと考えています。



セーリング部 セントバレンタインカップ優勝

2月26日に若洲海浜公園ヨット訓練所において行われた420クラスの大会に2組が出場しました。2年生末吉・繁田ペアが優勝、渡辺・高橋ペアが3位になりました。



新教習艇「はぶ」到着

新しい小型船舶教習所の教習艇が波浮港に到着しました。定員6名です。



小型実習船 新『みはら』進水式

第2代「みはら」として建造され、航海運用学実習・沿岸航海・海洋生物調査実習（底釣り漁業）・水産資源調査実習・海洋産業実習・体験航海をおこなう小型実習船です。

様々な水産、海洋実習が行えるようにROV、Aフレーム、CTD、全周ソナー、深海魚搬送装置等を装備しています。船舶運航に必要な各種機器については、第一船橋、第二船橋に大型船と同等のレーダー、電子海図、VHF、AIS等を搭載し、様々な航海情報を収集できることで航海学習の充実を図りました。

またバウスラスタとフラップラダーを採用することで、低速時の操縦性能を向上させました。救命設備も、膨張式救命筏を搭載し小型旅客船以上の安全性を確保しています。



カナダ留学報告 次世代リーダー育成道場で留学している高田君からの現況です

カナダに留学へ行き、日本を離れ早5か月を過ぎようとしている。カナダでの生活に慣れ色々な体験をしてきましたが、今回は私が思った日本とカナダの大きなギャップについて紹介したいと思います。一つはマスクをしていないことです。留学に行く前から知ってはいましたがカナダでは基本的にマスクをしている人はいません。しているとすればバスの中であったり室内であったりと人が密集しているところではマスクをしている印象があります。日本に帰ったらまたマスク生活だと思わず少し残念な気持ちになります。そしてもう一つは自動販売機です。どういうことかという日本の自動販売機は素晴らしいということです。日本の自動販売機はボタンを押したら飲み物が出てきますし、値段も多くの自動販売機が売店で買うものと同じ値段です。しかしこちらの自販機はというと時々飲み物が出てこなかったり、値段も売店で購入するより高かったりと散々です。やはり日本は技術、そして食に対して真摯な国なんだと改めて実感させられました。



令和4年度 卒業証書授与式挙行 65名卒業 答辞全文

答辞

冬の厳しい寒さも終わりを告げ、窓から差し込む日差しが春を感じさせる季節となりました。この良き日に私たち15期の卒業式を挙げていただけたこと、卒業生代表として心より感謝申し上げます。さて、溯ること3年、中学3年生の私たちは、東京の様々な場所から集まってきた初めて会う同級生や、学校生活への期待で胸を弾ませていました。それと同時にこれから始まる生活や親元を離れる不安を抱えながら、新学期の準備をしている方も多かつたのではないのでしょうか。しかしまさかの入学式延期からの中止、初めての顔合わせはオンライン上という形になってしまいました。家で一人パソコンを開いては、コードを入力して始まる授業、あの時の私たちは想像もしてなかったことでしょう。

夏の暑さが残る9月、長い自宅学習期間も明けついに私たちの高校生活が本格的に始まります。対面の学校生活、部活動、慣れない寮生活、心が折れかけたオリエンテーション、半年のブランクを埋めるかのように次から次に来る新しい生活が私たちを急かし、あっという間に2年生へと進級して行きました。コロナに振り回され続けた学校生活でしたが、居眠り常習犯、ただの反抗期男子、少しイカつく尖った人、声がうるさい人、絶対高校生ではない落ち着きようの人、自分の意見は絶対曲げない人、こんな個性豊かな仲間たちのおかげで私は楽しく毎日を送ることができました。

また何度か延期になることがありましたが、乗船実習は全員の中で思い出深いモノだったと感じます。「相手を思い合い協力し、より良いものにする」これが一番具体化されている実習では、支えてくれる仲間の大切さを心から感じることができました。きっと、最後岡田港へと入港する時には、乗る前に比べ、一人一人の顔つきは何倍にも逞しくなって戻って来たことでしょう。今でも船酔いの辛さと、ワッチ明けの朝日を忘れることはありません。他にも、本気で戦ったスポーツ大会、寒い中でも容赦ないダイビング、眠気には勝てない午後の授業、通常時とは異なる新しい文化祭など、挙げ出したらきりが無いほどたくさんの思い出がここにはありました。

このような生活を送ることができたのは支えてくれる大人の皆さんのおかげです。生徒の力だけでこのような思い出は絶対に作ることはできません。私たちにたくさんの愛情を注いで、時に厳しく指導して下さった先生方初め、年頃の子供をまとめるのが大変であつたらう舎監の先生方、新型コロナウイルス禍の中なのにも関わらず、たくさんのことに協力して下さった地域の皆様、そして何より、子供たちのやりたい事を最後まで見守って、いつでも心の支えになってくれた保護者の方々。本当にありがとうございました。

高校生活を思い返してみれば本当にあっという間の3年間でした。何かにつけて制限がある中でも楽しく過ごせるのが若者です。普通の生活、他愛もない会話、この何気ないありがたさを、この上ないくらい体験した私たちは、これからの生活に対してもこの経験を糧にしていけると思います。ですが、最後に欲を言うことができたなら、もっと近寄って大笑いしたかった、もっとマスクなんてないみんなの顔を見たかった、もっといろんな行事をしたかった、もっとあの仲間と部活をしたかった。もっとみんなと一緒にいたかった。一生に一度しかないこの青春に制限なんてされたくなかった。15期の皆さん。海国に入ってみんなに出会うことができて本当に良かったです。ありがとう。大人になっても良かったら会ってください。その際はぜひこの時の思い出をお酒と共に語り合ひましょう。

最後に本日、私たち15期生65名は、大島海洋国際高校を卒業します。そして私たちはまたそれぞれ新たな道へと進んでいくこととなります。もちろんつまずいて、悩める日も来ることでしょう。しかしここで培った経験と、友の笑顔、海の薫り、何気ない学校生活を胸に、後ろを振り返りながらも自分の足で一步一步前へと進んでいきます。繰り返しますが、未熟な私たちを支えて下さったたくさんのの方々、心より感謝申し上げます。大島海洋国際高校が、これからも素晴らしい歴史を刻まれることをお祈りして、答辞とさせていただきます。

令和5年3月5日 卒業生代表 長谷川杏奈

